



カビを育てる

楠原 正洋
楠原皮膚科医院院長

カビを育てる……。普通の人に聞かれたら、「え、何やってるの?」といわれそうなことである。当然皮膚科医であるから、この場合は真菌培養のことであるが、私が大学に入局して間もなく、初めて培養した症例が深在性皮膚真菌症のスポロトリコーシスであった。

生検組織をサブローブドウ糖寒天培地に植え、生えてきた菌のスライドカルチャー標本作製する。できた標本を顕微鏡で観察したとき、菌糸と分生子が形づくる美しい姿に感動を覚えた。それ以来カビの美しさに魅了され、真菌学の道をたどることになる。

当時、国立別府病院(現在の国立病院機構別府医療センター)におられた故・松崎統先生のもとで、研修を受ける機会があった。松崎先生は真菌学の大家で、白癬の大規模統計をとるため、外来受診したすべての白癬を培養されていた。外来には常に何十本もの斜面培地が置いてあり、毎週まとめて菌の同定をしていた。

いまのように分子生物学も発達していない時代であるから、同定はもっぱら目でみて色や形状で判断する。コロニーはいつも同じではなく、同じ菌でも色・形が微妙に異なるさまざまなバリエーションがあり、よく頭を悩ませていた。また環境中の真菌も生えてくることもあり、美しい緑色ビロード状や、サンゴ色のコロニーの雑菌にもちゃんとした学名があることも教わった。

開業して10年を過ぎるが、いまでも自分で培地をつくっては真菌培養に勤しんでいる。いつものおなじみの菌もあれば、いまだに頭をひねるようなコロニーに出くわすこともある。ささやかな楽しみである。

かつての真菌学の論文は、菌の同定のため、コロニーの色・形態・経時的な発育状況、スライドカルチャー所見、果ては走査電顕まで行い論説していた。最近では、分子生物学の発達により、菌の同定はもっぱら遺伝子レベルとなっている。学会発表や論文にしても、「培養で得られた菌は分子生物学的検査で遺伝子的にXX菌と同定された」で終わってしまう。せめてスライドカルチャーの写真ぐらい出して欲しいものである。

分子生物学的検査法の発達で、菌種の同定が正確となったこと、分類が新しくなったことは真菌学においては進歩であるが、カビを嗜むものとして、形態学的な論議が省略される傾向は些かさみしい思いがする。検体を検査室に出して、培養同定結果を受け取るだけでは味気ない。

これから真菌学を学ぶ人には、是非自ら数多くの培養を行い、まずは育てたカビをよく観察し、生物のもつ美しいフォルムを実感して欲しいと思う。